

書簡と公文書でたどる日露戦争

熊本博物館 木山貴満

はじめに

公文書＝「国及び独立行政法人等の諸活動や歴史的事実の記録」(内閣府)

→主に近代以降、行政など公的機関で作成・保存した資料

歴史的公文書は各地の公文書館で保存・管理され、一般の利用に供される。

※年限を迎えた公文書は一定の基準のもと選別され、公文書館へ。

※熊本県立図書館では「公文類纂」(明治期を中心とした熊本県の近代行政文書)、熊本市立図書館では熊本市政資料、天草市立天草アーカイブスでは天草市の地域資料を保存・公開。熊本大学文書館では熊本大学ならびに熊本に関する学術資料を管理・公開。

→熊本市公文書館はR 9 年度末 (2028) 開館予定。

※ちなみに、熊本市歴史文書資料室では『新熊本市史』時に収集された資料を中心に、各種歴史的公文書の複写版も利用可能 (とっても便利)

私文書＝(公文書以外の) 個人や会社が作成した資料

→ただし、「古文書」という語自体は「過去の時代に書かれた資料 (公文書・私文書を問わず)」を指す。

いうまでもなく、歴史研究は「古文書」を素材として研究を行い、歴史的事実を明らかにすることを目指す。今回は意識的に公文書 (熊本市の行政文書) と私文書 (個人書簡) に注目し、両資料からうかがうことのできる日露戦争の一側面に焦点を当て、資料活用の意義について考えてみたい。

日露戦争と熊本 (第六師団)

日清戦争後、日本は朝鮮半島、清国へ進出 → ロシアとの直接対立が不可避となる

日本は軍拡につとめ、日清戦争開始前をはるかに上回る規模に (陸軍師団増設、軍艦三笠など)

明治 33 年 (1900) 1 月、「扶清滅洋」を掲げた義和団が清国に起こり、排外運動を実行

(義和団事件／事変＝北清事変)

→鎮圧に失敗した清国は、追い詰められて英・仏以下八ヶ国へ宣戦布告

→日本・ロシアを主力とする連合軍は総攻撃の末、8 月に北京鎮定

→翌年 4 月、清国が莫大な賠償金を支払うことで講和受け入れ

軍事的弱体化が明らかな清国に対し、ロシアによる満州地域への進出姿勢は露骨なものに。

明治 35 年 (1902)、日本はイギリスと日英同盟締結 (→露仏同盟への対抗)

→ロシアとの直接対決が、日本国内で決定的なものとなったことを意味

同年 11 月、熊本では明治天皇を迎えて、陸軍特別大演習を実施

明治 36 年 (1903) 4 月、ロシア、前年の約束に違い、満州からの撤兵不履行

→さらにロシアは鴨緑江 (中国と北朝鮮の国境付近を流れる川) 河口に軍事基地を建設する動き

→ロシアの動きに対し、日本国内で対露強硬論が高揚。外交交渉が不首尾に終わったことで、即時出兵に向けた開戦準備が進む。

明治 37 年（1904）2 月、旅順付近での戦闘をきっかけに、日露両国は戦争状態へ突入

▽第一軍（近衛師団、第二師団：仙台、第一二師団：小倉）→仁川・遼東半島から奉天へ

▽第二軍（第一師団：東京、第三師団：名古屋、第四師団：大阪ほか）→遼東半島から北方へ

熊本第六師団は第二軍（のち第四軍）に属し、遼東半島から北進。

第六師団は首山堡（遼陽の南に位置）、奉天会戦などに中核兵团として投入

第六師団は日露戦争に 6 万 2000 人余りの兵力を派遣し、遼陽会戦では 3000 人を超える死傷者。

明治 38 年（1905）3 月、日本軍が奉天を占領

→ロシアは戦力に余裕を残す一方、日本は物資・兵力ともに枯渇

→アメリカのルーズベルト大統領の斡旋により、日露両国の講和会議実現

アメリカのポーツマスで講和条約調印

第六師団は明治 39 年（1906）3 月、全部隊が熊本に帰還し、復員を果たした。

1 熊本市政資料に見る、日露戦争と熊本市

（熊本市『熊本市政七十年史』、1964 年）

熊本市では明治 35 年の陸軍特別大演習受け入れ準備に奔走

当時の熊本市長・辛島格は 10 月に仙台出張（大演習挙行済みの地）。

祇園橋架橋 → 大演習受け入れのために実施。費用 1 万円（生成 AI 参考で現在の 3800 万くらい？）

御幸坂の桜の植樹→「今日に至るまで市民の憩の道として親しまれている」

明治 37 年（1904）2 月、日露戦争開戦

「辛島市長は全般を督励し動員事務の整備、充員召集後の家族保護、軍隊送迎、傷病兵慰問などの準備計画に日もない有様であった。」

「2 月の市在住 応 召 者（おうしょう）は将校、下士以下 248 名は市内の各民家へ宿営があり、さらに 5 月の大動員で市民から 310 名が応召となった。12 月には市民の応召は 672 名、戦死者 32 名、戦病死 6 となった。」

「辛島市長は佐世保へ或は小倉陸軍病院へ出張しそれぞれ戦傷者の慰問で奔走した。これまでに本市で戦争献金を申出た人員が 382 名、金額にして 4,895 円 34 銭 7 厘、本市民の愛国熱のほとばしりはかくも高潮して行くのであった。」

2 月 13 日通常市会において、河田議員より緊急動議

「日露戦争に関し佐世保に海軍を訪問し、国民としての感謝の意を表するため委員二名を派遣のこと」

→満場一致で可決

明治 38 年（1905）、熊本市で受けた動員令＝合計 48 回

特設部隊の編制に伴う兵舎設置が多忙を極める → 「仮兵舎」は全市にわたった

「意気天をつく」郷土部隊、混成部隊が入舎、滞在、出発

→「銃後を守る市当局の事務も寸暇さえ無い繁忙さ」

「8 月になって第一六師団¹の出発完了で一段落もなく、10 月下旬から凱旋部隊の市内入舎である。この状態は 12 月まで続いた。市内の兵舎へ来た部隊は 52 個部隊 20,429 人、市内の召集された兵員 1,088 人であった。」

「郷土の凱旋部隊を迎えるため、市の玄関口祇園橋には凱旋門が建てられ、晴れの帰還のコースである熊本駅から細工町、唐人町、明十橋、船場町には銃後を守った市民の心からなる花のトンネルが設けられ

た。」→「明治三十七・三十八年戦役記念写真帖」（熊本城頭彰会寄託）

★《資料1》熊本市政資料777（製本番号818）「凱旋軍隊歓迎一件書類」

→「永年保存」書類。明治38年10月、熊本市庶務係作成（全76号案件を記載）

（一）「準備整頓前帰来小部隊歓迎ニ就キ協議事項」

- ・凱旋の際、春日停車場で毎回5発煙火上げる。凱旋軍人の数に応じ、一人約一合の割合で酒樽寄贈。
- ・尚武会より音楽隊を春日停車場へ出す。
春日・上熊本、細工五丁目外れ（現在の祇園橋電停前付近）に「大国旗」を掲げること。
- ・軍隊通過の道筋は国旗を掲げ、夜間は点灯させること。
- ・軍隊到着の際は市の公職にあるもの、尚武会委員は各町内を勧誘してなるべく多数で春日停車場付近で出迎えを行うこと。
- ・市より出す煙火代、酒代は尚武会²より借り入れ（準備完了後、戻し入れ）
- ・凱旋歓迎に関する寄付募集は現金のほか、品物も受け付けること。

→集まった物品については福引により、凱旋の下士以下へ寄贈。

→その他、資料編参照。当該資料より凱旋兵士の出迎え事業は、市が主体となって実施。背景には地域社会との連携・協力（動員）、地域社会からの支持があったと考察。

なお、凱旋軍隊歓迎事業として、熊本市は「金五千円」支出を見込む（ただし、市民からの寄付金を別途上乗せ）。また、「今回ノ役ニ戦死病没セン軍人軍属ニ対シ臨時招魂祭ヲ執行スルコト」・「軍隊ノ凱旋アル毎ニ本市ノ公職ニ在ルモノハ勿論、其他市民一般盛ニ出迎ヲ為スコト」を決定。「市会選出ノ歓迎準備委員ハ今後準備完結ニ至ル迄継続シ、市参事会³ト協商シ、其完成ヲ期スルコト」と定めた。

（四）他都市への照会

凱旋軍隊の出迎えについて予算費目はどう処理しているのか、熊本同様陸軍師団を市内に抱える他都市へ照会

→発番を据えて他都市へ発出。他都市からはすべて回答を得ており、市長以下重役で回覧。

（五）「煙火委員」嘱託

軍隊凱旋時、春日停車場付近で煙火五発打ち上げを実施。

→監督委員として甲斐一郎を任命。

（七）凱旋兵士への酒寄贈の一例

《小括》公文書に注目することで、日露戦争当時における熊本市の組織的対応がいかなるものであったのか明らかとなる。凱旋軍人の出迎えは、市業務として広範な準備作業を伴うものであった。

また、日露戦争当時の熊本市政に注目することで、国家／戦争と地方自治体との関係性が浮き彫りとなる。

2 博物館への寄贈資料 ～ある日露戦争出征兵士書簡との出会い

「吉住繁象・西園寺琴寿関係資料」＝令和4年（2022）6月に当館へと寄贈された資料群（全80点）第六師団騎兵第六連隊に所属した吉住繁象より、西園寺琴寿（私立尚絅高等女学校卒業）宛ての書簡が中核資料となる。

西園寺家＝中世以来、砥川神社（上益城郡益城町砥川）の社司を務める名家。

近世期は砥川村庄屋を務めており、村方資料については熊本大学附属図書館所蔵。

通常と同じく、受け入れ後に資料整理を進めていたが、整理途中で資料内容の特質に気付く。

当時2人は交際関係にあったものの、騎兵隊下士官と地元名士の娘の恋愛は家格上の困難を伴った。さらに、吉住繁象が日露戦争へと従軍したことで、距離／時間的にも両者を隔てるものは大きくなり…。

本来、歴史研究において資料は「冷静に」読み解かれ、分析される対象だが、本資料に関しては整理中からさまざまな想像がかきたてられた。

※なお、資料整理時は上から順に整理したため、時系列はバラバラ。本講座では内容などから適宜時系列順で並べ替えを実施している（「資料番号」は博物館内での整理番号）。

吉住繁象＝騎兵隊第六連隊は当初桜橋南側に位置？明治34年（1901）、大江村の新兵営へ移転

→「騎兵第六聯隊趾」碑・馬魂碑が開新高校付近に残る

西園寺琴寿＝明治36年（1903）、私立尚綱高等女学校卒業⁴。（明治37年当時は17歳カ）

→尚綱高等女学校は当時熊本市昇町三番地（現安政町付近）に所在

《参考》資料参照。

出 征

★《資料2》（年月日欠）

→動員命令が本日午後一時に下った。

一旦出発したならば、もとより生還は望んでいない。「お別れの言葉」として一筆申し上げる。

出発の期日はわかり次第お知らせする。

★《資料3》（年月日欠）

→動員命令以来、一日千秋で待っていた出発の日も、いよいよ来る9日午前3時となった。

上陸を果たしたら、馬の蹄鉄が持つ限り進み、刀の目釘が折れるまでは休むことがないだろう。

もし少しでも時間があれば、生きている限り勇ましい戦報を差し上げる。

▽吉住繁象の出征前に出された2通では、文字通り「決死の覚悟」で戦地へ臨む旨を記す。文面自体も勇ましい文言が並ぶ。

★《資料4》（明治37年カ）4月19日

開戦から早数か月。

「我が騎兵」4名が敵騎兵30名と勇戦衝突→「血躍り肉振ふ」感情

30万人の陸兵は、満州の広原でロシア兵50万と激しい戦いを繰り広げるだろう。

「私たちはどんな不運なのか、いまだこの栄えある機会に参加することが出来ず…」

→前線配置が命じられず、残念。早く実戦に臨みたい、との文言を書き付ける。

前2通と同じく、戦線に向かう「勇ましさ」を強調した内容。

★《資料5》（明治37年カ）6月24日

すでに2回の実戦を経験。コサック騎兵との戦闘について。

ただし、損害は少なく、繁象も無傷。本書状作成当時、繁象は熊岳城⁵付近に所在。

「日ならずして大戦闘に加わるならんと指折り算へ相待ち居候」

葛 藤

★《資料6》(明治37年ヵ)7月10日

蓋平(遼寧省蓋州市)への攻撃について

(兵力に勝った日本軍がロシアを退け、蓋平を占領)

→ロシア兵が撤退したあとの陣地にはロバ・牛などの骨、砲弾破片、血痕、生血が乾いていない包帯…

「本当に惨憺たる戦闘後の光景」

追伸部分において、故郷からの手紙は戦陣中の慰めになること、閑暇の折は便りをくれるよう依頼。

※ 悲惨な戦場の光景を目の当たりにして繁象の意識に変化があったものか、好戦的な文言が激減。

繁象たち現場の兵士たちが、戦況推移について「灯台下暗し」と実感していたことも注意が必要。

★《資料7》(明治37年ヵ)7月19日

上記資料に連続。手紙の受け取りについて尋ね、琴寿からの返事を心待ちする様子がうかがえる。

《資料6》の延長線上にあるものか、戦況・戦闘・戦場に関する文言はほぼ皆無。

★《資料8》(明治37年ヵ)8月20日

繁象書簡の決定的変化。明らかに何か良くないことが琴寿の身に起こった様子が読み取れる。

繁象宛ての手紙に、琴寿が自身の悲哀の情を書いて知らせたものと推察。

これに対し繁象は言文一致体で琴寿に語り掛け、その気持ちに寄り添おうとしている。

「…悲哀の底に沈むあなたはさぞや辛かろう、さぞや苦しかろうという思いは異国に身を置き、生死の間にあっても私の胸から消えることはない。むしろ我が胸中に刻みこまれて、生涯にわたってこの煩悶から逃れることは出来ないと思われる。…」

「楽しき温かき月日」＝復員後の二人の暮らしについて言及

→もし琴寿との交際が断ち切られるようなことになったら、「生涯独身を押し通すのみ」

★《資料9》(明治37年9月初旬ヵ)

遼陽会戦(8月26日～9月4日)の激戦を知らせる。

泥濘のなかを「餡子付の団子」のようになって進軍。

ロシア軍の堅固な堡塁に、日本軍の死傷者が多数にのぼった様子がうかがえる。

夜襲をかけるも鉄条網に阻まれて、横隊陣形のまま死傷者多数。

生存者もようやくみな負傷して、手紙に書くのも「涙の種」となった。

「敵堡塁を乗っ取ったとき、生存者は総数の四分の一ほどに減り、屍の山、血の小川とはこのことか」とばかり大変驚きました。」→損耗率四分の三という繁象の体感

復 員

★《資料10》(明治38年)1月14日

満州で迎える2年目。高等司令部から部隊に戻ったことで、無事。

→遼陽会戦での苦闘と打って変わって「毎日殆ど無事に苦み居候」という状況。

凱旋まで1カ月余りというタイミングで、繁象の帰還を「御待ち被下度候」と述べる。

★《資料11》(明治38年)2月15日

決定的書簡2通目。繁象、乙寿の「決心と覚悟」をうかがう。

「…自分は此手紙を認むるに付けても、身を切るゝ想がして、乙寿さんの御両親様や兄上様に対し

て、うしろめたくて気が咎め、非常に良心の制裁を受けて、実に何共言へぬ苦痛を感じるのです。…」

「…此後愈々理想を実行するとしても第一が世間体でしょう、以前から吾等二人は汚れた交情で有った事ハ世間に知れ渡って、大概の人は一度位の後指ハ指したに相違あるまい、それが引ひて、御父上様や兄上様の御名誉を毀損した訳けであるから、一ツには御家柄に対し、一ツには世間に対し、快く互の願を容れて下さるか奈何か、是は一ツの疑問で有る。…」

「…どうかすると、御父上様や兄上様のこわいお顔に睨まれて「吉住貴様ハ何処までも厚顔の図々しい奴だな」とお叱りの声を聞く事が度々あるのです。其お顔を見、其お声を聞くと、如何にも罪を犯せし人が法律の網を遁かれて、巡查や探偵にでも、行き逢った様に、理と非の別ちも無く、争ふ勇氣もなく、恐怖と、驚愕とにて打倒れて了う様な心地かするのです…」

「乙寿さん、あなたの御決心次第で、此吉住繁象の運命ハ定まるのですから、どうか十二分の御覚悟と決心とを此悲境に沈める僕に迄知らして下さい。

頼むよ」

繁象は2月26日に鉄嶺（遼寧省鉄嶺市）発車、熊本到着は3月10日前後

→無事復員を果たした繁象には、明治39年4月1日付で戦功証・従軍記章、功七級金鵄勲章が授与されている。その後、二人は結ばれた。

おわりに ～書簡と公文書と歴史研究

「私文書」＝私的な文書だからこそ見えてくる歴史的事実／様相

→戦場という生死をかけた極限状況にあるなか、吉住繁象は熊本に残した恋人に手紙で懸命に寄り添う。まごうことなき人間性の発露が、私文書から看取可能。（観念的恋愛≠実践的恋愛）

歴史研究では公文書などによって組織体・社会としての歴史に迫りつつも、その根底にある一つ一つの「私」の営み⁶に常に留意することが肝要だということを改めて認識。

公文書・私文書など、さまざまなレベルの資料を博搜することで、歴史を立体的に捉えること、歴史の「奥行」を把握することが可能となる。公文書・私文書は歴史研究（特に近代史研究）において、両輪欠くべからざるものといえる。

¹ 第16師団は明治38年（1905）7月、京都で編成された陸軍師団。日露戦争で国内駐留師団が枯渇したため、第16師団を含む4師団が急遽編成された。

² 尚武会は熊本市役所内に設置。「尚武の気象を養成し兼ねて陸海軍隊の後援者たるを目的」。このほか、熊本県庁内には帝国軍人後援会熊本支部、熊本聯隊区司令部には帝国在郷軍人会熊本支部など、軍隊後援組織が各種設けられた。

³ 明治21年（1888）の市制・町村制で制定。参事会は市長、助役、名誉職参事会員で構成される。特に参事会員は地域名望家が就任し（市会で選出）、市町村財政の支持体ともなった。

⁴ 明治32年（1899）文部省「高等女学校令」公布により、尚綱も修業年限を4ヵ年と制定。県内唯一の高等女学校となった。『尚綱七十年史』（尚綱学園、1960年）

⁵ 中国遼寧省営口市。熊岳城温泉が有名。

⁶ 明治期における「恋愛」観については先行研究多数（小倉敏彦 1999ほか）。